

人権啓発演劇の志向するものについて

稲山 訓央

- I. はじめに
- II. 人権啓発運動における人権啓発演劇の役割
- III. 上演戯曲「天泣」
- IV. 実際に提示された問題点
- V. おわりに

I. はじめに

「人権啓発演劇を上演してもらえないか？」数年前から、主宰する劇団「Enfance Finie」にそういう依頼が来るようになり、当初はあくまで丁重に断っていたのであるが、それが演劇という文化を地域に根付かせる契機になればという思いから、2000年度に一度依頼を受けることにした。

その背景に、どうしても批評・評価を求めるあまりスタッフが殆ど県内のメンバーで占められているにも関わらず、県内での公演よりもむしろ大阪公演に力を入れてきた経緯があり、その結果滋賀の劇団であるにも関わらず大阪公演の動員の方が圧倒的に良いという状況を生み出し、また県内においては劇作家の著作権を考える上であまりにもずさんな状態を見るにつけ、視線を県内にも向け、滋賀の地で演劇文化を根付かせる活動をすべきであると判断したというものがある。その背景から、地域参加型ミュージカルの指導など県内における活動の一部として、引き受けることになったわけである。

その人権啓発演劇上演を通じて浮き彫りにされた人権啓発演劇に求められ、また志向すべきことなどを論じていきたいというのが本稿の目的である。

II. 人権啓発運動における人権啓発演劇の役割

「人権啓発演劇を劇団で上演する」というのが本来引き受けた仕事内容であるが、その演劇を上演するという行動が、人権啓発運動の中にいかに位置付けられるべきかということに考えをめぐらせ、いろいろと今までの県内における人権啓発演劇にはなかったであろうと推察される新たな試みをしていくことにした。

まず第一に、人権啓発演劇を観にきた観客と、上演した側と、どちらが内容について深く理解することができるだろうかと考えた。上演の内容がかなりよければ、ほぼ同じ理解を得られることがあろうかとも思われるが、少なくとも上演した側を越えることはないであろうことは容易に推測できる。またそれほどの上演をしたならば、上演した側の理解はかなりなものになるであろうということ。だとすれば、なるべく一般の方々に人権啓発演劇に参加していただくことが、まず人権啓発に繋がるのではないかということである。そこで上演する各自治体に呼びかけ、参加希望者を募ることになった。結果、ある一定数の参加を得ることができて、劇団の役者とともに芝居を作っていくことになった。

第二に、ありきたりのストーリーからの脱却というのがある。私自身も色々な場で、演劇やビデオを見る機会があったが、それらには不文律とでもいべき、水戸黄門的なストーリーがある。まず最初に普通に差別を感じることなく一般的に暮らしている家庭があり、それが、就職・結婚などを機に、急激に差別が浮かび上がり、最後にはその差別をしていた側が非を認めて謝罪し、明るい未来に向けて新たな一歩を踏み出すというようなものである。人権啓発運動に賛同し、上演に積極的に足を運んでくださる方は、ほぼ高い確率で私と同じ感想を持っているに違いないだろう。したがって、そういったありふれたストーリーから離れることで、あらたな問題意識を提起していきたいと考えた。そこで書いた戯曲が次章で掲載した「天泣」である。テーマは「日常生活に潜む差別への気付き」とし、ごく普通の日常的な会話と思われるもののなかに、差別用語をちりばめている。また実際にいじめによる自

殺者が多いという現状を踏まえて、その後残されたものがどういう想いになるのかということを描いた。

第三に、一般客の呼び込みである。人権啓発演劇の公演ということで自発的に集まっていただけの観客は、それだけでもある程度人権啓発について興味を抱いている人間である。実際人権啓発は、そういう運動にまったく興味を示さないような人に対してこそ行なうべきものである。そこで一般観客への遡及効果を考え、従来は2色刷り程度だったチラシもポスターも4色フルカラー刷りにし、通常劇団の本公演とまったく同じ位置付けに置いて、劇団の固定客のみならずにも多く観に来ていただける機会を誘導した。

以上3点が、実際に行なった新しい試みである。次に実際の上演戯曲を示し、またその次章において出てきた問題点などを提示していく。

Ⅲ. 上演戯曲「天泣」

「天泣」 作 稲山訓央

キャスト

中井 幸子

恭子 (その娘)

増田 良枝

良美 (その娘)

寺井 聡子

聡美 (その娘)

聡 (娘の兄)

平田 真佐子

真理 (その娘)

石辺 幹 (先生)

森本 吉雄 (先生)

1 中学校の校庭。

寺井聡、人待ち顔で中学校の校庭に植わった大きな木の下で待っている。

しばしの間。

とそこに、中井恭子がゆっくりと現われる。

恭子 待った？

聡 いや。

恭子 久しぶり。

聡 そうだね。

恭子 あれからは、会ってないから、6年？

聡 そんなになるかな。

恭子 前はずいぶん遊びに行ったのにね。

聡 そうだな、聡美と3人でよく遊んだから。

恭子 今、何してるの？

聡 サラリーマン。肉体労働だけど。

恭子 えっ？

と、聡の体をしげしげと眺める。

聡 いや、あんまり力は使わなくていいんだ。ほらあるだろう、ビルの外掃。

恭子 タイルとか貼ってるの？

聡 いや。外から窓や壁を拭く仕事。

恭子 ビルの壁伝いにかごに乗って上げられていくやつ。

聡 そうそう。

恭子 怖くない？

聡 ほら、あれだろ。高さを克服したいっていうか、高さに負けたくないっていうか。

恭子 そっか。

聡 そう。

恭子 今日は？

聡 うん、21世紀になったから、ほら、

と、木の根元を指さす。

聡 タイムカプセル。

恭子 うん。

聡 開けてもいいんじゃないかって。

恭子 21世紀の自分へのメッセージだったっけ。

聡 ほら、僕は学年がちがうから、部外者だし。

恭子 部外者ってことはないでしょう、聡美の兄なんだから。

聡 でも、ほら僕が言い出すのは筋違いだと思うし。

恭子 で、どうすればいいの？

聡 もうすぐ七回忌だから、それにあわせてタイムカプセルを開く会を
してもらえないかなって。

恭子 いつなの？

聡 2月18日（それぞれの公演日）。

恭子 判ったわ。

聡 ありがとう。

恭子 じゃ、また。

と、去る。去り際に、

恭子 あいかわらず、ひよろいわね。

聡 足の長さもあいかわらずだ。

恭子 じゃ、また。

と、去る。

聡 おやすみ。

暗転。

#2 舞台は一転、増田家の食事になる。まだ良美が中学生である。
父はまだ帰ってきていないため、母娘2人でとる夕食である。

良美 ごちそうさま。

良枝 そんだけしか食べないの。

良美 もうおなかいっぱい。

良枝 うそ、ほとんど手をつけてないじゃないの。

良美 そんなことないわよ、卵焼きだって食べたし。

良枝 ご飯は食べないの。

良美 うん。

良枝 帰りに何か食べてきたの？

良美 食べてないよ。

良枝 ほんとに。お菓子とか。

良美 お菓子なんか食べたら太るじゃない。

良枝 そうね。でも、中学生ぐらいの時は少し太ってるくらいの方がいいのよ。

良美 またそんな気休め言って。とにかく私は、もうごちそうさま。

良枝 じゃ私はまだ食べるからここで見てなさい。

良美 もう上がる。

良枝 もう食べなくていいからここで待ってなさい。

良美 えー。

良枝 見てたらまた食べたくなるかもしれないでしょ。

良 美 それが困るんじゃないの。

良 枝 あー、やっぱりがまんしてるんだ。

良 美 そんなことないよ。

良 枝 じゃそこで見てなさいよ。

良 美 はーい。

良枝、食事を再開する。見て見ぬふりの良美。

良 枝 あんた、何か話しなさいよ。

良 美 別に。

良 枝 学校はどうだったの。

良 美 そういえばママ、聞きたいことがあるんだけど。

良 枝 なあに。

良 美 部落地区ってあるの。

良 枝 どうして。

良 美 今日、人権学習があってね、同和地区のことについて習ったんだけど。

良 枝 そう。ないと思うんだけど。

良 美 じゃあ、何でそんなこと学校でやるんだらう。

良 枝 そりゃ、差別する心をなくさないといけないからじゃないの。

良 美 だってさ、男女差別とか外国人差別とかなら判るけど、部落差別って何よ。

良 枝 何って。

良 美 同和地区がないんだったら、差別もないんじゃないの。

良 枝 …。さあ、ごちそうさま。本当にもういらないの。

良 美 私もごちそうさま。

良 枝 もっと食べた方がいいと思うけどなあ。

良 美 でも、聡美みたいなのは嫌かな。

良 枝 聡美ちゃんて神社の裏の寺井さんとのの？

良 美 そうそう。いくら細くてもあんなぶっさいくなのは嫌だなあ。

良 枝 まあ。

良 美 それにいつも何か臭いしさあ。

良 枝 あんまり友達のことをそんな風に言うものじゃないわよ。

良 美 別に友達じゃないもん。

良 枝 同級生でしょ、友達じゃないの。

良 美 はいはい。

と、ふっとため息。

良 美 何か嫌だな。

良 枝 何よ。

良 美 最後は説教なんだから。

良 枝 判ったら2階に上がりなさい。

良美、立ち上がり、

良 美 もう、勝手なんだから。

暗転。

3 舞台は寺井家。やはりまだ中学生の頃である。夕食時である。

聡 子 あんた早く食べなさいよ。

聡美、答えない。

聡 子 聞ってるの。あと20分もしたら出なきゃなんないんだからね。

聡 今週夜勤だったっけ。

聡 子 そうよ。羽のばしてぶらぶら出歩かないでよ。

聡 だってさ、聡美。

聡 子 聡美が出歩くわけないでしょ。聡に言ってるの、聡に。

聡 はいはい、判りました。

聡 子 高校生の内から夜遊びを覚えちゃうと、お父さんみたいになっちゃうよ。

聡 で、早死にしちゃうと。

聡 子 あんた、いつまでもちまちま食べてるんじゃないの。返事もしやしない、一体誰に似たのかねえ。

聡 聡美！

聡 美 はい。

聡 子 じゃあ、私用意してくるから、食べ終わったら片付けといてよ。

聡 (聡美の代わりに) はい。

聡 子 何あんた、気色悪いわね。

聡 はーい、聡美がんばりますう！

聡 子 ばーか。

と言って、出掛ける用意をする為に去る。

聡 聡美、どうした、いつもより元気がないんじゃないか。

聡 美 別に。

聡 お前、もっと明るくなないと彼氏もできないぞ。

聡 美 別にいらないもん。

聡 変なやつ。

と、そこに中学校の制服を持った聡子が入ってくる。

心なしか薄汚れている様である。

聡 子 あんた、何よこれ。

聡 美 何。

聡 子 こんなに汚して。この前、クリーニングに出したばかりでしょ。

聡 美 ごめんなさい。

聡 子 どうしてこんなことになったの。

聡 美 ちょっと、転んで。

聡 子 ちょっとじゃないでしょ、前も後ろもこんなに汚れてるんだから。

聡 汚いのが好きなんじゃないの。

聡 子 聡！

聡 好きで転んでるんじゃないんだからいいだろ。

聡 美 ごめんなさい。

聡 子 あんた、いじめられてるんじゃないんでしょうね。

聡美、首を横に振る。

聡 子 ならいいけど。いじめられたらすぐに言うのよ。何にもいじめられる事なんかないんだからね。お父さんが早く死んだってねえ、

聡 また、はじまった。

聡 子 女手一つで立派に育ててるんだ。それに、住んでいる所でとやかく言わせないよ。

聡 お母さん、時間大丈夫なの。

聡 子 あー、もうだめだわ。

と、壁に掛けてあるお父さんの遺影に敬礼。

聡 子 お父さん、行ってきます。じゃ、後の事はよろしく頼んだわよ。

聡 はいはい。

と言って、聡子、仕事に出掛けて行く。

聡 　　いってらっしゃーい。

聡子が出て行くのを確認して、

聡 　　早く食べて片付けしちゃえよ。俺は洗濯物干してくるから。

聡 美 　　はい。

聡 　　おまえさあ、もっと小綺麗にしろよな。俺が同級生だったらいじめちゃうぞ。

と言いながら、聡去る。一人残される聡美。

暗転。

4 下校時刻。校庭に植えられた木の辺りに石辺が立っている。と、そこに帰り仕度の森本が現れる。

森 本 　　石辺先生。

石 辺 　　あ、森本先生。もうお帰りですか。

森 本 　　ええ。石辺先生は？

石 辺 　　もう少ししたら帰ります。

森 本 　　どうしたんですか、こんな所で。

石 辺 　　いや、ちょっとね。森本先生は今年でしたね。

森 本 　　ええ。一の五です。なかなかやんちゃな生徒が多くて、手を焼いております。

石 辺 　　そうですか。

森 本 　　先生は3年でしたね。

石 辺 　　そうです。ちょっと、困ってるんです。

森 本 先生がお困りだなんて珍しいですね。

石 辺 大きな声では言えませんが、どうもあるみたいなんです。

森 本 はあ。

石 辺 いじめ。

森 本 そりゃ、どのクラスでも多かれ少なかれあるんじゃないですかね。

石 辺 いや、ちょっと深刻でね、それで、昔の事思い出してね、ここに来てみたんです。

森 本 ああ、タイムカプセルですか。

と、木の根元を指さす。

石 辺 少々古いでしょうか。以前はよくやったものですが。

森 本 そんな事ありませんよ。素晴らしいと思います。

石 辺 森本先生。

森 本 作文だとね、他人に読まれる事が前提となりますから、なかなか本当の事が出てこないんですよ。タイムカプセルは将来の自分へのメッセージですから自分に嘘をつけない。

石 辺 はい。

森 本 自分自身に向きあって自分の心に向きあって、そして今自分がしている事に気付いてくれたら。

石 辺 はい。

森 本 是非やりましょう。絶対効果抜群ですよ。…って釈迦に説法でしたかな。

石 辺 いえいえ、これで決心ができました。ありがとうございます。

森 本 先生、まだおられますか。

石 辺 いや、もう帰ります。

森 本 そうですか。どうです、一杯。

石 辺 いいですね。ここでしばらく待っていて下さい。鞆をとってきます

から。

と、石辺、去る。

森 本 ごゆっくり。

暗転。

#5 舞台は平田家。やはりまだ中学生の頃である。夕食時である。

真 理 ねえ、お母さん。

真佐子 なあに。

真 理 今日学校で、タイムカプセルの話が出たの。

真佐子 石辺先生？

真 理 そう。21世紀の自分へメッセージだったかな。

真佐子 へえ。変わらないものね。

真 理 お母さんも埋めたの。

真佐子 ええ。私の場合は30年後の自分だったかな。

真 理 30年って事は。

真佐子 そう、まだ掘り起こしてないの。

真 理 そうなんだ。

真佐子 それで、何書くの。

真 理 うーん、まだ考え中。お母さんは何書いたの。

真佐子 そうね。…もう忘れちゃったわ。

真 理 うそ。実はちゃんと覚えてるんでしょ。

真佐子 そんな事ないわよ。本当に忘れちゃった。

真 理 そんなものかなあ。私も忘れちゃうのかなあ。

真佐子 忘れちゃおうとしたのかもね。

真理 え、どういうこと。

真佐子 開ける時まで覚えてたらおもしろくないでしょ。

真理 そうよね。じゃ、私も適当に書いてすぐ忘れちゃおうかな。

真佐子 それはだめよ。

真理 どうして。

真佐子 それじゃタイムカプセルの意味がないじゃない。20世紀の、14歳のあなたがどんな風に考えていたかをあとで知ることが大切なんだから。

真理 そうよね。じゃあ、今の私の気持ちを一所懸命書くわ。

真佐子 そして、きっぱり忘れる。

真理 はーい。

真佐子 石辺先生もなかなかいい事をなさるわね。

真理 お母さんの頃からあったんでしょ。

真佐子 そうね。だけど、自分の今の気持ちを真正面から見つめなおす事は素晴らしい事よ。

真理 でも私、21世紀まで生きてるかなあ。

真佐子 なによ、お母さんだって21世紀まで生きているつもりなのに。

真理 私が死ぬって訳じゃないのよ。ほら、ノストラダムス？

真佐子 ああ、あれ。

真理 1999年7の月に人類が滅亡してたりして。

真佐子 そうなったら、日本中にたくさんのタイムカプセルが埋められたままになってしまうのかしら。

真理 何万年かして新しい人類がそれを掘り起こして、昔人類は自分の言いたい事を書いたものを土の中に入れて表現したとかになるのかなあ。

真佐子 あなた、SFの才能あるわね。

真理 そうそう、SFの作家を目指そうかな。

真佐子 そのためにはもっと知識を広めないかね。

真 理 わかりました、宿題やってきます。

真佐子 頑張ってるね。今日のおやつプリンよ。

真 理 えっ、モロゾフ、モロゾフ？

真佐子 もちろん。

真 理 平田真理、頑張ってきます。

と言って立ち上がる。

真佐子 宿題終わったら、おりにきなさい。

真 理 はい。

と言って去る。

暗転。

6 暗転中に、玄関チャイムの音。

恭 子 はい。

明転。

舞台は、中井家。

聡美と恭子が話しながら舞台に入ってくる。

恭 子 こんなに遅くに来るなんて、珍しいじゃない。

聡 美 うん。

2人、食卓に座る。

恭 子 食事してきた？

聡 美 うん。

恭 子 私まだだからバナナ食べるね。食べる？

と、聡美にすすめる。聡美、首を横に振る。

恭子、食卓においてあるかごの中からバナナを取り、食べはじめる。

恭 子 どうしたの、今日は。

聡 美 タイムカプセル。

恭 子 ふえ。

聡 美 タイムカプセル。

恭 子 ああ、あれ。明日までだっけ。

聡 美 うん。

恭 子 後で、ペアっとやるわ。

聡 美 何書くの？

恭 子 ま、適当かな。思ってる事書きゃいいんじゃないの。

聡 美 そうだね。

恭 子 今、思ってる事素直に書けばいいんじゃないの。例えば、密かに森田君の事が好きだとか、

聡 美 そんな事ないよ。

恭 子 えー、そうかな。いつもそっちばかり見てるんじゃない。

聡美、黙って首を横に振る。

恭 子 ま、いいんだけどね。

恭子、バナナを食べ終わり、ひとごちついた様子。

恭 子 それより今日、良美に呼び出されてなかった？

聡 美 うん。

恭 子 どっちなのよ。

聡 美 呼び出されてた。

恭 子 やっぱり。何か体育館裏で見たような気がしたのよねえ。大体体育館裏ってのが古典的なんだよな。何かあったら体育館裏、何かあったら体育館裏、アニメでも、小説でも、マンガでも、何かあったら体育館裏。体育館裏に徳川埋蔵金でも埋まってるのかなあ。なあ、聡美どう思う。

聡 美 埋まってないと思う。

恭 子 でしょー。徳川埋蔵金ってほんとにあるのかな。

聡 美 どうだろ。

と言ってくすりと笑う。

恭 子 やっと笑った。この世の中笑って過ごさなきゃだめだよ。ちょっとおばさんくさいけどさ。

聡 美 そうだね。

恭 子 で、何言われてたの。

聡 美 うん。

恭 子 言いたくなかったら言わなくてもいいけどさ、一応幼稚園からのつきあいじゃない。

聡 美 目障りだって。

恭 子 どういう事。

聡 美 私の見えないところに行ってくれるって言われた。

恭 子 そりゃ、難しいわな、同じクラスなんだから。

聡 美 うん。

恭 子 どうするのよ。

聡 美 真理ちゃんに、席代わってもらおうかな。

恭子 どうして。

聡美 窓際の一番後ろだから。

恭子 ちょっとまって。そういう問題じゃないでしょう。

聡美 だって。

恭子 今から良美に電話かけるわ。

聡美 いい。

恭子 どうして。

聡美 恭子ちゃんも、狙われるかもしれないから。

恭子 そんなの気にしなくていいよ、私は敢然と立ち向かうから。

聡美 恭子ちゃんはいいなあ、強くて。

恭子 じゃあさあ、その気持ちを、タイムカプセルに入れる文章にぶつけてみたら。

聡美 うん。

と、そこへ幸子が帰ってくる。

幸子 ただいま。

恭子 あ、お母さん、お帰り。

幸子、聡美がいることに気が付いて、

幸子 あれ、聡美ちゃんも来てたんだ、こんばんは。

聡美 こんばんは。

幸子 (時計を見て) まあ、もうこんな時間じゃないの。聡美さんもそろそろ帰った方がいいわね。おうちの人心配しているでしょう。

聡美 あ、はい。もう、帰ります。

幸子 その方がいいわね。

恭子 えー、今来たばかりだよ。

幸 子 来たばかりでも、もうこんな時間よ。ね、聡美さん。

聡 美 あ、はい。もう帰ります。

と言って、聡美立ち上がる。

聡 美 じゃあ、さようなら。

恭 子 あ、じゃあ、また明日。

聡美、軽くうなずき、部屋を出て行く。幸子、食卓に座り、

幸 子 ごはんまだ？

恭 子 バナナ食べたけど。

幸 子 じゃあ、どうする？

恭 子 どうしてもいいわよ。わたし的には、ピザーラかな。

幸 子 じゃあ、何か好きなのを1枚注文して。2人で食べましょう。

恭 子 はい。

幸子、服を着替えに行く。恭子、ピザーラのメニューを持ち出し、電話を
かけはじめる。

恭 子 ピザーラさんですか。はい。077-566-0833です。はい。中井です。中井。
はい。あってます。ゲッツとジェノバのハーフ&ハーフ、Mサイズ
で。はい。ハンドトスで。はい。それだけで結構です。はい。2415
円ですね。はい。よろしく申し上げます。

恭子、電話を置く。幸子、室内着に着替え入ってくる。

恭 子 注文しといたわよ。

- 幸子 何にしたの。
- 恭子 ゲッツとジェノバのハーフ&ハーフ。
- 幸子 O. K.
- 恭子 今日はお疲れ。
- 幸子 いつもの事だけど。
- 恭子 そうよね。
- 幸子 聡美ちゃんの事だけど、こんなに遅くに出歩かせちゃだめよ。
- 恭子 出歩かせちゃって言ったって、向こうが勝手に来たんだもの。
- 幸子 それは、あなたに隙があるからですよ。
- 恭子 隙って何よ。
- 幸子 それにあなた、私が遅いときに聡美ちゃんちに遊びに行ったり、食事をいただいたりしてるでしょ。あれもやめなさい。
- 恭子 どうしてよ。彼女があそこに住んでるから。
- 幸子 めったな事言うんじゃない。私はね、女性が男性と同じ様に、働ける社会を目指して活動しているのよ。あなたも知っているわよね。
- 恭子 ええ。
- 幸子 母親の帰るのが遅いから、娘の素行が悪くなるって言われたくないの。
- 恭子 素行が悪いって何よ。
- 幸子 こんな時間に出歩いてるって事は、十分に素行が悪いっていう事よ。それに、聡美さんの所だって、お母さんは夜勤に行ってるんでしょ。親の目が届かない所で、娘が夜遊びするのは、好ましくないわ。
- 恭子 何よ。娘が娘がって。そんなお母さんが一番男女差別してるじゃないの。
- 幸子 屁理屈言うんじゃない。
- 恭子 はいはい。判りました。以後気をつけます。

と、恭子立ち上がりお茶の用意をする。

幸子 気のない返事ねえ。

お茶を入れながら、

恭子 ピザーラ遅いわね。

暗転。

#7 舞台は大きな木の植わった校庭である。

そこに、石辺に先導され、良枝、聡子、真佐子、幸子が入ってくる。

石辺 この辺りが、昨日タイムカプセルを埋めた位置です。少し土の色が違うでしょう。

良枝 そうですわね。

石辺 で、今日はどういうご用件なのでしょう。

聡子 このタイムカプセルなんですけどね、少し行き過ぎがあるのじゃないかと思ひまして。

石辺 はあ、どういう事でしょうか。

聡子 何でも先生は、今の自分と将来の自分について書かせたとか。

石辺 はあ、そうですが。

良枝 嘆かわしい。全くお気づきでないのですねえ。

石辺 はあ。

良枝 最近の入学試験の面接では、自分の短所を言って下さい等の質問はしてはならない事になっています。ご存知ですね。

石辺 はあ、まあ、一応。

幸子 人権問題です。

良 枝 先生の今回なされた質問は、この面接の問題と同じですね。

石 辺 まあ、一面から見れば、そうなのですが。

良 枝 どっから見てもそうじゃないですか。

石 辺 ですが、まあ自分以外誰も見ることはないわけですし。

幸 子 果してそうでしょうか。生徒は皆埋めた場所を知っている訳ですから、掘り起こそうとすれば、いつでも出来るんじゃないですか。

石 辺 まあ、そうですね。

幸 子 ですから、人権問題と言っているんです。

良枝、聡子、真佐子、幸子それぞれが口々に「そうよね」、「明らかに人権問題だわ」と言う。

石 辺 実はですね、保護者の皆さんはお気づきではないかも知れませんが、今クラスの中でいじめがあります。いじめというのは結構難しい問題でありまして、例えばいじめている生徒を注意すれば、それが全く逆効果になる場合もあります。また、いじめられている生徒にも、いつもそうとは限りませんが、何らかの原因があります。生徒達は皆、本質的にいい子ばかりだと信じていますから自分自身に正面から向き合ってもらいたかったんです。ですから、このタイムカプセルを企画しました。それ以外に他意は、ありません。

真佐子 自分と向き合うべきだというのには、私は賛成です。

幸 子 平田さん。

聡 子 うちの子がいじめられてるんですか。

返事がない。

聡 子 うちの子がいじめられてるんですね。誰がうちの子をいじめているんですか。先生。誰がうちの子をいじめているんですか。先生！

と、そこに聡が走りこんでくる。

聡 お母さん、大変だ！

聡 子 どうしたんだい。

聡 聡美の奴が、飛び降りて、

石 辺 何。

聡 子 聡美！

暗転。

8 時間軸は一転、現在になっている。

舞台は、夜の校庭である。そこに良美が恐る恐る入ってくる。中央に植えられている大きな木の辺りを周囲をうかがいながら、しゃがみこむ。タイムカプセルが埋められてある辺りを掘りおこそうとした瞬間、

恭 子 良美？！

良 美 あ、恭子……。

恭 子 久しぶり。

良 美 明日だよ、タイムカプセル。

恭 子 そうだけど。

良 美 恭子はどうしたの、こんなところで。

恭 子 誰かが来るんじゃないかって、待ってたのよ。

と、そこに聡がやってくる。

聡 こんばんは。

良 美 あの？

聡 聡美の兄です。

良 美 あの。

恭 子 で良美はどうしたの、今日。

良 美 恭子の考えていた通りよ。

恭 子 そう。

良 美 何が書いてあるか恐かったわけ。

聡 どういうことですか。

良 美 聡美の文章。

恭 子 やっぱり気になるでしょう。

良 美 何もかもお見通しってわけ。

恭 子 いや、そんな格好いいものじゃないよ。私もすごく気になるから。

良美、聡に。

良 美 ごめんなさい。私、聡美さんをいじめていたから。

聡 いいんですよ、そんなことは。

恭 子 そんなこと言ったら、私の方がもっとひどいわ。友達面してたし。

聡 友達面って。

良 美 恭子は別に仲良くしてたじゃない。

恭 子 仲良くしてたのに、なんの相談もなく逝っちゃったんだから。

良 美 そうなの。

と、そこに真理が現れる。

良 美 真理。

真 理 あ、あの。

恭 子 久しぶり。

真 理 えっと、あの。

良 美 タイムカプセルの中身、気になったんでしょ。

真理 ……ええ。

良美 真理みたいないい子だってそうなんだ。

真理 いい子ってそんな。

聡 どうですか、聡美に深く関わっていた人が集まっているんです。ここで、開けてみませんか。

真理 え、だって。

良美 真理だってそのつもりで来たんでしょ。

真理 つもりっていうか。

恭子 開けましょう。私と聡さんもそのつもりで来たから。

良美 どういうこと。

聡 聡美の書いた文章が、もしみなさんを恨んでいる文章だったとしたら、隠してしまおうかと思っていたんです。

恭子 みんな、私からのタイムカプセル開封会の案内が届くまで、聡美のこと、忘れてたでしょ。忘れる筈はないんだけど、忘れようとしてたんじゃないかな。

真理 そうね。

良美 うん。

聡 みんなは、聡美の分まで楽しく生きて行って欲しいんです。でも、聡美のことを忘れて欲しくない。あの案内をみて、聡美のことを思い出して、ここに集まってくれたみなさんで、聡美の最後のメッセージを見ればいいんじゃないですか。

恭子 いいお天気のに、あえて雨を降らすことはないんです。晴れの中で降る雨は私たちだけでいいんじゃない。

真理 わかったわ。

良美 じゃあ、開けましょうか。

4人は無言でタイムカプセルを掘り起こす。

用意した工具でタイムカプセルを開き、聡美の埋めたカプセルを探し出す。

恭子 これね。

それぞれ、うなずく。

そのカプセルを聡に渡し、聡は、そのカプセルを開く。

聡、ゆっくりとその手紙を読んで、涙を流す。

舞台は、ゆっくりとその翌日の光景に変わる。

すなわち、翌日のタイムカプセル開封会になる。

舞台上に、石辺先生、それぞれの保護者が集まってくる。

群唱 私たちは、タイムカプセル開封会でそれぞれのタイムカプセルを開いた。

あの頃の私たちの思いを思い出した。

そして、恐る恐る聡美の書いたタイムカプセルを開封した。

そこにかかれてあったのは、自分が生きてきたこと、

周囲の人々に対する感謝の言葉であった。

「わたしにはたくさんの友達がいる。

みんなによって私は支えられている。

私はこのタイムカプセルを開くまでに、いやもっとずっと早く死んでいるだろう。

でも、残されたみんなに言いたい。いままで本当にありがとう。」

私たちの人生は、気まぐれな天気のようなもので、

晴れ間の中に急に雨が降ってくることがある。

その雨、天泣は嫌な雨じゃない。

明日へ生きていく恵みの雨なのだ。

またどこかで雨が大地を濡らし、

やがてその雨もゆっくりと乾き、

そして人はゆっくりと歩き出す。

その雨は、

こんなにもいとおいしいのだ。

いとおしいのだ。

空から雨が降ってきた。皆は空のある一点をゆっくりとみつめる。
そこになにかがあるのかもしれない。
了。

IV. 実際に提示された問題点

実際の上演については、人権啓発という観点からは⁽¹⁾なんら問題が生じることがなく上演が終わったのであるが、実際に稽古を始めるにさきがけて上演戯曲を検討する意味で行なわれた実行委員会において、いくつかの問題点が指摘された。II. で述べた新しい試みに関連するものが殆どであったが、ここで列挙する。

- ① 人が死ぬことが納得いかない。特に、教員が気付いているにもかかわらずそれを阻止できないのは、現場の教員を愚弄している。
- ② あちらこちらに差別用語があるのはどういうつもりか。
- ③ 商品名を出すな。
- ④ 部落差別問題が全く描かれていない。
- ⑤ 滋賀県に顕現教育は時期尚早。

それぞれの意見に関して、以下のような意見を申し述べて了承された。①に関しては、実際に自殺者がでている現状を受け止め、それを舞台にすることに何の問題があるのかという意見を申し述べた。こういうのは人権啓発演劇ではないとも言われたが、IIで述べた意見を申し述べた。②に関しては、差別用語狩りをする必要性を踏まえつつ、差別用語無しに差別を描くことは出来ないとし述べた。それはすなわち、差別用語、もしくは差別的発言というのは、それが無意識に、あるいは悪意的に使われるときに問題があるのであって、差別を描く際にはやむをえないとし述べた。③は、演劇のリア

リティーを追求していくと、「化学調味料」だの「赤いとても辛い液体」などと同様、通常の生活で出てくるものは容認すべきであると申し述べた。④に関しては、これは人権啓発演劇であるし、それ以外の差別も描いているが、物語の根幹は、同和問題においていると申し述べた。⑤に関しては、私の申し述べている考えはともかく、この作品自体が顕現教育を体現しているのかどうかと言う点から申し述べた。

実際に観て頂いた観客のアンケートは、たいへん好意的であり、一般参加スタッフとは、芝居の稽古を通じて人権啓発がかなり深い部分まで浸透することができたと確信している。

V. おわりに

この「天泣」もまた、人権啓発演劇の究極の形ではなく、単なる一つの形にすぎない。ただ、演劇の持つ可能性というのは、人権啓発運動に新たなる方向性を示すことができるのではないかというのが、本稿の趣旨である。

人権啓発演劇の志向するものは、何か。それは結局人権啓発に関する深い理解と関心を得るために、芝居作りに積極的に参加すること。それこそビデオや映画の上映ではなし得ない新たな地平を指し示しているのではないかと考えるのである。

本稿を契機に、一般参加型人権啓発演劇⁽²⁾が増えていけばと考えている。

注

(1)初日前日に、機材車が路面凍結のため正面衝突事故をおこし、一部の機材が破損し、役者一名が怪我をして舞台にでることが不可能になった。今回は出演予定になかった役者を呼び出し、一日で台詞と段取りをすべて覚えて、無事上演を終了することが出来た。

(2)「天泣」は以後、山東町文化のまちづくり事業団からの依頼で住民参加型演劇として上演されている。上演を検討される際は、ご連絡いたるよう、お願いしたい。